

普及技術

分類名〔果樹〕

ニホンナシ「あきづき」の花芽着生向上技術（その2）

—環状剥皮による側枝更新法—

農業・園芸総合研究所

1 取り上げた理由

近年、品質の良いニホンナシとして導入が進んでいる「あきづき」は、「幸水」等で用いられるせん定・枝管理技術では腋花芽の着生が少ないことから花芽着生向上技術を開発した（普及に移す技術第85号普及技術）。また、数年で側枝上の短果枝が大きく減少し、側枝が強大となって樹形を乱す原因になっていることから、側枝更新の技術を開発したので普及技術とする。

2 普及技術

- 1) 発芽期から満開3週間後までに側枝基部2～3cmの位置に幅2cmで環状剥皮を行う（図1）。
- 2) 環状剥皮によって側枝基部の潜芽などが発芽し（図2）、当年中に次年の予備枝として使える枝になる（表1）。
- 3) 発生した枝は、普及に移す技術第85号普及技術で紹介した花芽着生向上技術に準じて管理すると、1mあたり約14個の花芽着生数となり（表2）、冬季せん定で側枝の更新が可能となる。

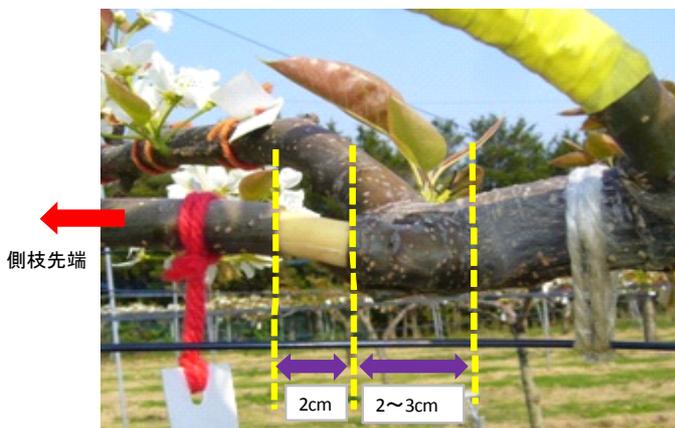


図1 環状剥皮した側枝基部（満開7日後）



図2 環状剥皮による側枝基部からの発芽（剥皮30日後）

3 利活用の留意点

- 1) 環状剥皮による新梢発生率は70～90%であるが（表1，3），冬季せん定時の側枝間引き跡から潜芽が伸長する割合は、50%である（表3）。
- 2) 環状剥皮を行った側枝の果実品質は、2年間無処理と同等である（表4）。

（問い合わせ先：農業・園芸総合研究所 電話 022-383-8132）

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

ナシ、ブドウの整枝・せん定法改善による花芽着生安定化技術 平成 18～22 年度

2) 参考データ

表1 環状剥皮の処理時期の違いが新梢発生に及ぼす影響(平成22年)

試験区 (処理月日)	新梢発生率 (%)	新梢発生 本数(本)	基部径 (cm)	枝長 (cm)	カス形成率 (%)
発芽期(4/11)	70.0	1.3	10.2	87.8	87.2
満開7日後(5/10)	80.0	1.5	9.5	68.1	86.4
満開21日後(5/25)	90.0	1.2	10.3	80.4	82.5

※新梢発生率以外は環状剥皮1ヶ所あたりの平均値

カス形成率:カス長/剥皮長*100

調査は平成22年12月に行った

表2 剥皮処理によって発生した新梢の誘引が花芽着生に及ぼす影響(平成22年)

処理時期	枝区分	総芽数 (個)	花芽率 (%)	葉芽率 (%)	不発芽率 (%)	枝長 (cm)	枝長1m当り 花芽数(個)
平成21年 4月30日	新梢	18.8	67.0	17.6	9.6	68.1	
	予備枝	13.5	42.6	13.0	19.4	64.0	
	計	32.3	58.1	15.9	13.2	132.1	14.2

注)二次伸長部分はデータに含まれない

花芽か葉芽の区別が明確でない芽及び15cm以上の新梢のデータは省略した

誘引は満開65日後に行った

調査は平成22年12月に行った

表3 側枝への処理の違いが新梢発生に及ぼす影響(平成21年)

試験区	新梢発生率 (%)	平均新梢 発生数(本)	基部径 (mm)	枝長 (cm)
冬季せん定	50	0.6	9	79
芽傷	10	0.1	12	67
環状剥皮	80	1.7	9	69

※冬季せん定は2/19, 芽傷と環状剥皮は4/30に実施

調査は平成21年12月に行った

表4 側枝への環状剥皮が果実品質へ及ぼす影響(平成22年)

試験区	1果重 (g)	地色 ^z (指数)	硬度 (lbs)	糖度 (Brix%)	pH
平成21年環状剥皮	521ns	3.3ab ^y	6.3ns	12.6ns	4.60a
平成22年環状剥皮	470	4.0b	6.1	13.4	4.59a
無処理	433	3.0a	5.7	13.0	4.77b

z: 農水省日本なしカーチャート地色(1～6)

y: 異なる英字間にはチューキーの多重検定で1%水準で有意差あり, nsは有意差なし

3) 発表論文

a 関連する普及に移す技術

a) ニホンナシ「あきづき」の花芽着生向上技術(第85号普及技術)

b その他

a) 東北農業試験研究 第61号

4) 共同研究機関

なし